

「活動の概要と研究成果」

NO.J2333

活動題目：軍事基地の近隣を生きる：
マーシャル諸島イバイ島における都市形成の歴史人類学的研究

所属：京都大学大学院 人間・環境学研究科

氏名：大竹 碧

本研究の目的は、米軍基地に隣接するマーシャル諸島共和国クワジェリン環礁イバイ島を対象として、米国政府、米軍、そして現地住民を含む多様なアクターによる、都市形成の歴史過程を明らかにすることである。本年度は、イバイ島と近隣環礁における実地調査から、下記の知見を得た。

1. 島の景観に埋め込まれた戦争と強制移住の記憶

太平洋戦争中、イバイ島は日本軍の補助施設となった。戦後も同島は、米軍による強制移住計画の対象地となった。現在の島内には、太平洋戦争や強制移住の記憶を喚起させる遺物が残存している。例えば、日本統治期の技術を用いて、同島の先住民が建設した貯水槽や、米軍が建設したミサイル実験シェルターなどである。

堅牢な遺構が残る一方で、住民による記憶は更新の渦中にある。例えば、太平洋戦争後、米国政府と軍は「米軍によるマーシャル人の解放」を祝い、「解放記念日」を創設した。だがイバイ島の統治者層は、戦争記憶の中心化を拒絶し、環礁の資源を祝う「感謝祭」へと祝日の意味を変更した。公的記憶のなかでは、「外来者による戦争」の重要性が薄められてきたのだ。他方、個別のイバイ島住民は、日本統治期を生きた自らの親族にかんする記憶を基に、太平洋戦争や強制移住の記憶を再構成し、継承してきた。

2. 「太平洋のスラム」と呼ばれた島における社会関係形成の諸相

現在のイバイ島においては、近隣の米軍基地から「排除する者／される者」に限定されない、多層的な社会関係が編まれている。同島で暮らすマーシャル人住民は、土地の軍事利用に対する怒りを抱えながらも、日常的にはこれを背景化させ、基地関係者と親密な関係を築く。同時にイバイ島内において人々は、「クワジェリン環礁の先住民である／ない」という境界を再生産しつつも、近隣環礁との間で頻繁に人やモノを移動させ、異なる社会経済的背景をもつ者同士の共住を成立させている。

一方、首都マジュロなど他環礁の人々は、SNS上で、イバイ島を「太平洋のスラム」と表象することがある。イバイ島住民は、強制移住以降続いてきた侮蔑的表象に対し怒りを表明し、日常生活のなかで抵抗し続けている。